



JASTJがリードする

小 出 五 郎

ものごとには「量」と「質」の二面があるが、JASTJも例外ではない。JASTJは順調に成長し大きな組織になってきた。これからは成長に見合うよう「質」の充実、JASTJの力量と存在感を増すことが大切と思う。

科学技術は私たちの暮らしの基礎だ。人間、経済、政治、社会、そして何よりも未来と切っても切れない関係にある。どのような科学技術を選択するかで、世の中は大きく変わる。それだけに、ジャーナリズムをはじめ科学コミュニケーションに携わる職業人の果たすべき役割は大きい。

そんな志ある職業人の組織としてJASTJがあり、JASTJがリードする。

これをこれからの「大目標」としたい。

2006年度も、全体としては、2005年度に掲げた「2つの（中）目標、8つのポリシー」路線を継続したい。ただし、ポリシーに1つを加え、「9つのポリシー」とする。

2つの（中）目標は次の通り。

1) JASTJ10年の実績の維持と発展。

2) JASTJのステイタス向上、魅力の拡大に努め、特に若い会員の増加を図る。

9つのポリシーは次の通り。

1) JASTJ事務局の充実

活発な組織のためには確かな事務局が欠かせない。「ボランティアからシステムへ」をさらに進める。

2) 理事会と会員との協力体制を強化する

JASTJ活動をさらに活発にするために、諸活動の担当理事を「デスク」とし有志会員とともに活動する「部会」制を実施する。

会員には、以下の3) から9) に挙げる活動計画のいずれかに、積極的に手を挙げて参加して欲しい。多数の会員が参加する体制ができてこそ、充実した活動ができる。

3) 例会、見学会の実施

4) ML、HPの維持管理

5) 第5期科学ジャーナリスト塾の支援

6) 科学ジャーナリスト賞2007の実施

7) 「本をつくろう」プロジェクトの具体化

8) 国内交流・協力の拡充

9) 国際化への対応

2007年4月にメルボルンで開かれる世界大会に参加を求められている。国際化への対応はまだ努力目標の段階にあるが、前向きに取り組みたい。

以上、会員のみなさんの協力をお願いする。

(JASTJ会長)

CONTENTS

巻頭言 JASTJがリードする	1
総会報告	2
第1回科学ジャーナリスト賞1 (表彰式・受賞者一覧) ...	3
第1回科学ジャーナリスト賞2 (経緯)	4
第1回科学ジャーナリスト賞3 (作品紹介)	5
例会報告1 韓国のES細胞研究捏造事件が問いかけるもの ...	6
例会報告2 女性が輝く国の科学と教育	7
第4期科学ジャーナリスト塾報告1	8

第4期科学ジャーナリスト塾報告2	9
会員だより1 駆け足フィンランド科学の旅	10
会員だより2 チェルノブイリ原発事故20年	11
会員だより3 「物理学校」出版余話	12
会員だより4 アジア初のPCST-9に参加して	13
会員だより5 米国サイエンスライティング留学記② ...	14
WFSJだより/新入会員の自己紹介	15
事務局だより/会員のBOOKS	16

プロジェクト別の活動を引き続き展開

今年度の通常総会は5月26日、会員52人（ほか委任状38人）が出席して、日本記者クラブで開かれた。昨年度の活動報告と決算、今年度の活動方針、予算計画のいずれの議案も承認された。また、科学ジャーナリストを目指す若い学生を奨励するため、今年度から大学生以下の学生については年会費を半額（6000円）に減額する特別措置（細則第2条）を設けることも決まった。

活動報告で小出会長は、1年前に就任した際に掲げた「2つの目標と8つのポリシー」が、この1年間でどれだけ達成できたかを点検するかたちで報告した。

まず「事務局の充実」については、会員の管理や会計、庶務、連絡の業務を、昨年7月から（株）JPRに委託した結果、円滑に進むようになった。「理事の担当制」を明確にした点では、担当理事の努力によって、科学ジャーナリスト塾、科学ジャーナリスト賞、本を出そうプロジェクト、ホームページ、メーリングリストなどの面で活動が進展した。

一般会員がサポーター登録し、担当理事と一体となった運営を狙いにした「会員サポーター制度」については、なお不十分な点も多く、課題を残しているが、サポーターとして科学ジャーナリスト塾では藤田貢崇さん、漆原次郎さんら、科学ジャーナリスト賞で池田純子さんの貢献が大きかったと感謝した。

塾では、新しい塾長の林勝彦理事のもとに実習のアドバイザーとなった会員8人や、塾生OBが裏方として支えたことで、「大きな成果を挙げた。第4期を終え、塾は軌道に乗った」と振り返った。

優れた科学ジャーナリストを顕彰することを目的に創設した「科学ジャーナリスト賞」は、この総会後に第1回の表彰式が行われるに至った。「本をつくろうプロジェクト（複数）」は具体化には至らなかったが、出版社との打ち合わせが進むなど、次につながる動きが始まっている。

ホームページでは、会の催し案内や会報、お知らせについて、会員に

発信しているが、更新などメンテナンスの面で、改善点が残っている。国際化への対応については、高橋真理子理事が世界科学ジャーナリスト連盟（WFSJ）の理事として会合に出席するなどした。

■ 会員160人・13団体に増加

この1年間で会員は個人20人、賛助会員3社（発明協会、テクノバ、早稲田大学）がそれぞれ入会、4人が退会し、全体で会員数160人、賛助会員13社（21人）の計181人になった。その間、早稲田大学やフィンランドセンターなどの団体から協力の申し入れがあるなど、社会からの期待も大きくなってきた。

収支の面では、会費などの収入が452万円に対して支出は339万円で、差し引きの残が113万円。昨年度当初の繰越金515万円と合わせて計628万円を新年度に繰り越した（内訳は別表）。会員や賛助会員の増加が予想以上の収入増につながった。

小出会長は、新年度の活動も「2つの目標、8つのポリシー」を継続するとした。特に事務局の業務については、塾や賞に関わる業務のほかホームページ、メーリングリストの管理・更新も一括委託をする考えを示した。新年度予算の計画でも、その考え方にに基づき、事務委託費の増額やプロジェクト関係（賞、国際化対応、本をつくろうなど）に厚めに支出する案を提案し、了承された。

（事務局長・佐藤年緒）

2005年度 決算報告書

（2006年3月末）

収入の部			支出の部	
前年度繰越金		5,153,688	月例会費（見学会含む）	1,143,185
			会議費（理事会など）	114,193
会費収入	正会員（131人分）	1,530,000	総会	122,841
	賛助会員（10社）	2,580,000	会報発行（4回の発行のうち3回支払い）	344,490
			HP作成・管理費	66,630
雑収入		414,043	通信費（郵便、ファクスなど）	263,566
内訳	月例会会員外参加	72,000	事務局委託費（月額6万円）	720,000
	図書販売	13,000	事務費（文具、コピー、交通費など）	151,045
	月例会懇談参加等	174,000	名簿・会員証発行	38,517
	サイエンスバー参加	55,000	P. 本をつくろう（3回打合せは会議費で計上）	0
	塾見学者寄付	100,000	P. 国際化対応（翻訳、世界連盟加盟費など）	72,663
	利子	43	P. 科学J賞（会議、書籍、郵送など）	48,556
			P. 塾への支援 ジャーナリスト塾助成	160,000
			予備費（事務局引越し、入会しおり印刷）	102,610
			その他（献本用「科学Jの世界」購入など）	44,675
単年度収入計		4,524,043	単年度支出計	3,392,971
			単年度収支	1,131,072
			次年度繰越金	6,284,760

（注）Pはプロジェクト事業

科学ジャーナリスト賞2006受賞者決まる

大賞に「理系白書」の元村有希子記者（毎日新聞）

優秀賞に中村梧郎、福岡伸一、大島秀利、石高健次の4氏

日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）が優れた科学ジャーナリストの仕事を顕彰する第1回科学ジャーナリスト賞の受賞者が別表のように決まった。

大賞には、ブログを含む「理系白書」の報道が評価されて毎日新聞の元村有希子記者が選ばれ、優秀賞には、ベトナム戦争の枯葉剤被害から30年余も目をそらさないフリーカメラマンの中村梧郎氏、BSE問題で優れた一般向け科学書を著した福岡伸一・青山学院大教授、アスベスト問題を粘り強く追及した朝日放送の石高健次氏と毎日新聞の大島秀利記者がそれぞれ選ばれた。

大賞を含め、新聞記者が2人、フリージャーナリストが1人、テレビが1人、科学者が1人という内訳となった。

今年3月までの候補者と候補作品の募集に対し、34件の応募があり、それをJASTJ内の小委員会で12件に絞って最終選考にあげ、4月19日に開いた選考委員会で活発な論議のすえ、全員一致で上記の受賞者を決定したものである。

5月26日午後7時から東京・内幸町のプレスセンタービル10階ホールで開かれた「科学ジャーナリスト賞2006」の発表・表彰式は、小出五郎会長の司会ならびに演出による、なかなか感動的な式典となった。この日まで受賞者を公表せず、会場で初めて明らかにする方法をとったからである。

まず、JASTJ科学ジャーナリスト賞担当理事の私（柴田）が、賞創設の経緯、応募状況、選考経過などを説明、次いで選考委員の紅一点、米沢富美子さんが壇上に上がった。

米沢さんは「選考は楽しかったが、今日までしゃべれなかったことが苦しかった」と会場を湧かせたあと、こう話した。

「優れた科学ジャーナリストを評価する私の基準は、自分の足で歩いて一次情報を掘り起こすこと、途中で投げ出さず、どこまでも追及することだが、中村梧郎さんのなされた仕事は、まさにその典型です」。そう紹介して、登壇した中村さんに、自らJASTJのロゴマーク入りトロフィーと花束を贈呈した。

中村さんは「30年前、戦争が終わったあとベトナムに行ったとき、枯れたジャングルを見て、これは大変なことだと思った。この問題はまだ終わっていない。この賞を励みに、これからも取材を続けたい」とあいさつした。



▲表彰式で、大賞のトロフィーを手に挨拶する元村有希子さん

科学ジャーナリスト賞2006 受賞者一覧（敬称略）

科学ジャーナリスト賞2006（大賞）		
毎日新聞記者	元村有希子	ブログを含む毎日新聞の「理系白書」報道に
科学ジャーナリスト賞2006（優秀賞）		
フリーカメラマン	中村 梧郎	ベトナム戦争の枯葉剤被害から30年余も目を話さない報道姿勢に
青山学院大学教授	福岡 伸一	分子生物学者として斬新な視点から狂牛病を分析し、一般向け科学書にまとめたことに
朝日放送アスベスト取材班、代表	石高 健次	朝日放送アスベスト取材班代表として住民被害の救済を訴えた報道に
毎日新聞編集委員	大島 秀利	毎日新聞記者としてアスベスト問題に粘り強く取り組み、社会に訴えた報道に

【註】選考委員（順不同・敬称略）

外部委員 白川英樹（ノーベル賞受賞者）、米沢富美子（慶大名誉教授）、北澤宏一（日本科学技術振興機構理事）、黒川清（日本学術会議会長）、村上陽一郎（国際基督教大学教授）

JASTJ委員 小出五郎（会長）、武部俊一（副会長）、牧野賢治（前会長）、高木鞠生（理事）、柴田鉄治（理事）

中村さんの仕事は、昨年、岩波書店から出た「母は枯葉剤を浴びた——ダイオキシンの傷あと」にまとめられている。

続いて選考委員の北澤宏一さんが立ち、「科学者の書いた優れた一般向けの書を読んで、思わず引き込まれ、興奮した。生命体は同じ外形を保ちながら、構成する物質をどんどん取り替えていること、草を食べていた牛に無理やり肉骨粉を食べさせたことへのしっぺ返しがBSE（狂牛病）であることなどを知った」と話し、福岡伸一さんにトロフィーと花束を贈った。

福岡さんの著書「プリオン説はほんとうか？」（講談社ブルーバックス）「もう牛を食べても安心か」（文春新書）などが評価されたものだが、福岡さんは「プリオン説はすでにノーベル賞まで出ていて決着済みのようにみられているが、決してそうではないことを科学者として言いたかった。評価されて嬉しい」と語った。

次いで登壇したJASTJ選考委員の高木鞠生理事が「昨年の大きな話題はアスベスト問題だった。毎日新聞の大島秀利さんと朝日放送の石高健次さんは、それぞれの立場で早くからこの問題に取り組み、その取材と報道によって、事実上、クボタに従業員被害や住民被害を認めさせたものといっているだろう」と二人の仕事をたたえた。

大島さんは「アスベスト被害の深刻さは、これからが大変」と語り、石高さんは「これまでの仕事で自分たちを科学ジャーナリストと考えたことは一度もなかったのが、意外感とともに嬉しかった」と感想を述べた。

「ここでファンファーレか音楽が欲しいところだが」という小出会長の言葉を受けて、最後に登壇した選考委員のノーベル化学賞受賞者、白川英樹さんが、毎日新聞の元村有希子記者への「大賞」の授賞を発表した。

白川さんは「選考委員を引き受けたときから私なりにリサーチしていたが、元村さんの仕事は最初から私の候補に入っていた」と前置きして、

科学報道に新しい地平を開いたといわれる毎日新聞の「理系白書」シリーズに触れたあと、とくに元村さんのブログを取り上



▲表彰式で話す米沢富美子さんと会場風景

げ、「私も時々覗いているが、刺激を受ける。アクセスが200万件を超え、一日5000人の人が見ていることは大変なことだ」と高く評価した。

元村さんは、「大賞をいただいととても嬉しい。いまサイエンス・カフェというのが流行っているが、私のブログは、さしずめサイエンス居酒屋の女亭主といったところでしょう。科学技術を取材している人がどんな人間か、文系・理系とも関係のない普通の人間なのだと分かってもらえただけでもよかったと思う。大変だけど、続けたい」と語った。

このあと、懇親会が開かれ、受賞者、選考委員、JASTJ会員などが親しく歓談した。

この発表・表彰式をもって、第1回科学ジャーナリスト賞の選考はすべて終わったが、選ばれた受賞者の顔ぶれや仕事の内容を見てもなかなかのものであり、また、僅かの差で受賞できなかったもののなかにもいいものがたくさんあって、初めての試みとしては大成功だったといえるのではなかろうか。

翌日のほとんどの新聞や一部のテレビ局までも報じてくれて、受賞者の栄誉が広くたたえられたことと、科学ジャーナリスト賞の創設が広く知られたこともよかった。

受賞者の発表方式をどうするかについては、選考委員の間でも意見が割れたが、今回は、発表・表彰式まで受賞者を伏せておく方式をやってみようということになった。この方式には、JASTJ会員のなかから異論も出たが、外部選考委員の方々の絶大なご協力もあって、会場に来て「現場」を見た人たちの間では、概して評判はよかった。

来年どうするかは、これから慎重に検討する必要があるが、この方式にもかなりの利点があり、感銘深い表彰式になったといえよう。

外部選考委員をはじめ、多くの方々のご協力にあらためて感謝申し上げたい。（柴田鉄治）



▲記念撮影する受賞者（前列右から大島、石高、元村、福岡、中村さん）

受賞者の作品紹介 科学技術と社会の接点に迫る力

毎日新聞社の元村有希子記者が第1回科学ジャーナリスト賞の大賞を、またフリーカメラマンの中村梧郎氏ら4人が優秀賞を受賞した。評価対象となった報道や著書は、いずれも独自の立場から科学技術と社会の接点に鋭く迫る力を持っている。受賞理由、評価対象となった報道、著書の内容は次の通り。

【大賞】

◆ 元村有希子氏（毎日新聞科学環境部記者）
理由：ブログを含む毎日新聞の「理系白書」報道に

「理系白書」は2002年に始まった連載企画で、当初から大きな反響を呼んだ。今回評価対象となった「理系白書 '05」（第2部「文理分け教育を問う」・第3部「流動化の時代」）、「理系白書 '06」（「ニッポンは強いのか」）はそれを引き継ぐ形で05年1月から始まり、元村氏が中心になって進めてきた。このほか連載コラム「発信箱」や日記風につづった「理系白書ブログ」も評価対象となり、特に「理系白書ブログ」は科学技術分野のブログとしては常にトップクラスの閲覧率を維持、科学技術を一般の人々の身近に引き寄せる上で大きく貢献した。

【優秀賞】

◆ 中村梧郎氏（フリーカメラマン）
理由：ベトナム戦争の枯葉剤被害から30年余も目を離さない報道姿勢に

評価対象となったのは『新版 母は枯葉剤を浴びた ダイオキシンの傷あと』（岩波現代文庫）。1983年発行の旧版の写真の一部入れ替え、加筆修正のほか、「そして子どもたちは大人になった」「ダイオキシン、その人体影響」の2章を新たに加えた。枯葉剤の影響で二重体双生児として生まれたベトとドクラ旧版に登場した胎内被ばく者を20年後に訪ね、懸命に生きる彼らの姿をリポートしている。その前向きに生きる姿は枯葉剤散布の犯罪性と被害の悲惨さをいっそう浮き彫りにする。

◆ 福岡伸一氏（青山学院大学教授）
理由：分子生物学者として斬新な視点で狂牛病を分析し、一般向け科学書をまとめたことに

BSEの病原体が異常型プリオンタンパクであるとした米国の生物学者ブルシナーは、1997年にノーベル賞を受賞、その説は今では定説になっている。しかし福岡氏は、評価対象になった『プリオン説はほんとうか？』（講談社ブルーバックス）などで、「なお疑うに十分な側面が多数残されている」として可能性を検証している。むろん結論は出ていないが、現在なお進行中のBSE問題の対策にもつながる研究課題を、何が真に科学的に合理的なのかという姿勢を貫きながら提起している。

◆ 石高健次氏（朝日放送アスベスト取材班代表）
理由：朝日放送アスベスト取材班の代表として住民被害の救済を訴えた報道に

◆ 大島秀利氏（毎日新聞編集委員）
理由：毎日新聞記者としてアスベスト問題に粘り強く取り組み、社会に訴えた報道に

「10年で51人死亡 クボタが開示」と、初めて社名入りで報じた毎日新聞の記事（05年6月29日）は、過去のものと思われがちだったアスベスト被害が現在も進行中で、今後さらに拡大するという現実を改めて突きつけた。一方、朝日放送は「終わりなき葬列～発症まで30年、いま広がるアスベスト被害～」（05年5月28日放映）など一連の番組、報道で戦前から続く被害を丹念に追い、社名こそ出さなかったもののクボタ旧工場周辺の住民に中皮腫が広がっている事実を発掘、同社に被害者の



▲大賞のトロフィー

実態を公表するよう追い込んだ。いずれも粘り強い取材を続けた結果で、両者あいまってアスベスト対策を大きく前進させた。（高木鞠生）

韓国のES細胞研究捏造事件が問いかけるもの

米本昌平・科学技術文明研究所所長

3月30日の例会には、科学技術文明研究所所長の米本昌平さんを講師にお招きし、「韓国のES細胞研究捏造事件が問いかけるもの」と題して話をしてもらった。米本さんの講演は、韓国の事件にとどまらず、より広く、日米欧とアジア諸国の比較分析に及んだ。生命倫理への対応のあり方が、世界的に見ると「3+1」極化しているという興味深い見解を聞くことができた。

生命倫理の対応のあり方は「3+1極化」

米本さんの研究所は、英語、仏語、スウェーデン語、韓国語など、世界8カ国語をカバーでき、多彩なスタッフが世界の生命倫理政策の情報収集に努めてきた。各国の生命倫理への対応をみると、先進国では米国、欧州、日本という3極化が進んでいる。そして、中国や韓国などの「非先進国」を併せた「3+1極化」が21世紀初頭に起こっているという。

まず米国では人体組織が完全に商品化している。この国では徹底した自己決定、自己責任を負わされる。本人が承諾すれば人体組織は流通に乗り、組織の分配、加工、保存、利用はサービス産業化してしまう。

一方、欧州では米国のアンチ・テーゼとして政策立案がなされる。その典型がフランスだ。人体の処分を自己決定に任せておくと、人権秩序が危うくなる。だから国家の管理の下に置く。法が整備され、人体組織の採取、加工、貯蔵、分配、輸

出入に国権が発動される。

日本はどうか。欧州のような法的整備はされていない。今まで「自己決定、自己責任、倫理委員会を通す」という対処をしてきた。米国の生命

倫理のつまみ食いである。

その日本を米国、欧州と同じ位置に並べるのは、生命倫理が議論され、その価値観の重要性がビルトインされている国だからだ、と米本さんは指摘する。例えば、韓国では、ES細胞研究に未受精卵を二千個集めることに疑問を感じない。先進国ではあり得ないことだ。日本や米国、欧州は、未受精卵を数個集めるのも大変だ。韓国などの「非先進国」もバイオテクノロジーの実用化時代に入ってきたが、そこでは生命倫理の議論がないという。

韓国ES細胞研究の背景

米本さんは、韓国のES細胞研究捏造事件の背景として3点を挙げた。

第1に後発国としての気負いである。韓国では日本や先進国に対し対抗意識が強い。このこともあって国家ぐるみでES細胞研究に着手し、先発諸国より先に特許を全部取ろうとした。

2番目は生命倫理の価値観の欠如だ。韓国は急ピッチで生命倫理の法的整備をしているが、社会の中に生命倫理の価値観が形成されていない。

第3に韓国内の経済格差である。この格差により、社会が守るべき価値規範の水準がどんどん下がっている。卵子の提供者には、ソウルで働いている脱北者とか低所得の朝鮮族などがなっている。代理母として子供も産む。だが、彼女たちは社会的地位も低く、発言力もない。

ただ、ES細胞事件についてのソウル大学の調査は見事だったと米本さんは評価する。昨年12月15日に特別調査委員会を作り、わずか3週間で最終報告書を出した（科学技術文明研究所のホームページ <http://www.clss.co.jp> に掲載している）。事件の科学的なファクトについての情報はこの最終報告書が一番よいという。

講演後は瀬川至朗会員の司会で、活発な質疑応答があった。生命倫理をめぐる日本の法的・制度的欠陥が話題になった。官庁の縦割り行政の弊害などが指摘され、どういう形の法整備が必要なのかという点で熱い議論もなされた。（西野博喜）



▲米本昌平さん

女性が輝く国の科学と教育

ヘイッキ・マキパー・日本フィンランドセンター所長

4月27日の例会では、フィンランドの科学と教育事情を、日本フィンランドセンター所長のヘイッキ・マキパー氏にご紹介いただいた。日本フィンランドセンターは、1998年に日本とフィンランドの間の研究・教育・文化の相互交流を進めるために設立された。マキパー氏自身も1983年の三宅島御山噴火の際には、現地調査のために来日した、「日本酒が大好き」という火山学者でもある。

日本への熱い視線

「これまでフィンランドは日本と同様に、主に米国と共同研究を進めてきました。世界中が米国と共同研究を進める中、フィンランドは新しい発想を求めて、積極的に日本との連携先を探しています。フィンランドと日本との共同研究によるイノベーションにとっても期待しているのです」とマキパー氏は話す。すでに東北福祉大学（福祉）、北海道大学（神経科学）など、多くの研究機関との共同研究が実施されている。

近年、EU諸国は欧州研究圏という枠組みをつくり、ヨーロッパ全体で協力して科学技術研究を進めている。2010年にはアメリカを抜き、研究技術面で1位になるのが目標という。「技術イノベーションや特許の数で1位になることも大切ですが、それを達成するために各国が力を合わせて努力することが最も大切なのです」とマキパー氏は話す。

特徴ある教育制度

基礎教育から大学まで授業料や給食費は無料というフィンランドでは、教育も社会福祉の一部である。日本ではあまり知られていないフィンランドの教育制度が紹介された。

基礎教育は7歳から16歳までの9年間だ。この期間で学習内容を十分理解できなかった場合、さらに1年間だけ基礎教育を受けることができるというユニークな制度がある。「わかるまで、できるまで」を具体化したこの制度は、国がいかに教育を重視しているかを示している。基礎教育を終えると、過半数が高等学校へ進み、残りは実学志向の職業学校へ進学する。高等学校を卒業すると、

大学とポリテクニクの2種類の上級学校が用意されている。「男子の多くは、ものづくりに興味があるようで、ポリテクニクに多く進みます。大学での女子の割合は75%と、非常に高いのです」とマキパー氏は説明する。さらにフィンラン



▲マキパーさん

ドの大学は修業年限が

5年で、卒業すると修士号を取得でき、高いレベルの教育が施されている。つまり、フィンランドの女性には、高学歴の人々が非常に多いのだ。

社会を支える女性たち

フィンランドでは、フルタイムで働く女性がほとんどだ。女性がさまざまな分野で活躍し、現在の大統領が女性（ハロネン大統領）であることにも象徴されている。「フィンランドの女性たちは高学歴であり、政界や財界など様々な分野へ進出しています。しかも、社会保障が充実しているので、育児中でも仕事を続けられます。子育てのために優れた人材が埋もれてしまうのは、社会的に大きな損失です」とマキパー氏は言う。出産・育児を担う人々への手厚い保障は、主要先進国では米、仏に次ぐ出生率1.80（2004年）にも現れている。

驕ることなく科学的な判断で

OECDが実施した学習到達度調査で、フィンランドの子供たちは総合的に高い得点を示した。その理由を尋ねられたマキパー氏は、「この調査は、過去2回しか行われていません。正確な学力の把握には、さらに多くの調査が必要で、今は正確なことは言えません」と答えた。教育の国、フィンランドに生きる人の自信とも聞こえたが、常に正確なデータを要求する、この科学者らしい考え方こそ、的確で着実に政策を進める上で必要なのだと感じた。（藤田貢崇）

多彩な作品、討論も深まる

優れた科学ジャーナリストの育成を目指す「科学ジャーナリスト塾」の第4期が、3月に全12回の日程を終えた。約50名の塾生が、ゲストの講演を聴講。演習では、各班が「温暖化」「農業」「脳と心」「産業と技術」「再生医療」「環境と化学物質」「知的財産」「原子力」をテーマに、熟練アドバイザーの指導のもと、新聞、雑誌、ウェブなどでの作品づくりに励んだ。各班の成果はいかに？ 順位発表もあり盛り上がった3月22日の作品発表の模様をお伝える。

発表のトップバッターは「温暖化」班。月刊誌スタイルのカラーページ作品を披露。温暖化に対して家庭でできることを特集するなど、読者の視点に立った記事を作った。

次の「農業」班は昨年、引野アドバイザーのもと優勝を果たしているグループ。新聞形式とし、有機農業と従来式農業の実態比較をトップ記事にした。昨年に続いて塾に参加した白川英樹先生も取材同行、執筆、撮影と大車輪のご活躍だった。

一方、動画も取り入れてウェブ形式で発表したのが「脳と心」班だ。ロボットがヒューマノイド型に近づくほど不気味に見える「不気味の谷」の現象を、ロボットの映像もまじえて紹介した。

「産業と技術」班は、産官学連携をテーマに横断的に取材を重ね、新聞形式で発表。新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の責任者に記者会見を試みるなどの成果を披露した。

メンバーが揃わない中、少人数で頑張ったのが「再生医療」班だ。生理学や法学などの研究者に取材。基本解説から韓国の捏造事件の時事問題まで、再生医療の現状を冊子形式で多面的に伝えた。

「環境と化学物質」班はウェブ形式。1998年ごろ加熱した環境ホルモン（内分泌かく乱物質）報道の検証を試みた。環境省、市民団体、研究機関、報道、リスクコミュニケーションの5分野の関係者への取材を敢行。当時の加熱報道に対して、各分野で捉え方の違いがあることを浮き彫りにした。

「知的財産」班は、楽しめる新聞づくりを目指した。メンバー思い思いの関心を活かすため、知



▲科学ジャーナリスト塾の発表風景

的財産高等裁判所や手塚プロダクションなど、様々な現場を広く取材した。発表者・池城さんのこなれたプレゼンテーションも目を引いた。

そして最後は「原子力」班。高速増殖炉問題が日本の原子力政策の中心にあると考え、高速増殖炉の光と影をウェブで表現した。経済産業省の原子力安全保安委員長などへの取材の成果を、班の若きリーダー役、李さんが発表した。

各班発表後の討論は、アドバイザーからのコメントも多く、深まった。とくに環境ホルモン報道に対しては「まだ総括はされていない」「ジャーナリストは世間の流れに翻弄されてはならない」などの意見が出され、塾生は真剣に耳を傾けた。

さて、いよいよお待ちかねの順位発表。塾生、アドバイザー、サポーターが、良かったと思う上位3作品を点数化して投票した。見事1位に輝いたのは「知的財産」班。2位は、今年も注目された「農業」班。3位は討論が盛り上がった「環境と化学物質」班。以下「脳と心」、「産業と技術」、「温暖化」、「再生医療」、「原子力」となった。

最後に林塾長が「今期は鋭い質問が多く出た。塾は毎年レベルが上がってきている」と総評。修了証を手にした第4期生は、科学ジャーナリスト塾を巣立ち、地階の居酒屋へと向かっていった。

塾生の作品はJASTJのHP内「科学ジャーナリスト塾」(www.jastj.jp/Zyuku/index.htm)でご覧いただく予定だ。（漆原次郎・第4期塾サポーター）

第4期の総括と各班からの報告

【総括 林勝彦塾長】 塾は年々進化し4期目を終えた。とくに藤田貢崇・漆原次郎氏らサポーターと懇親会幹事の馬来由理子氏の活躍は特筆に値する。一方で、発表と講評の時間の短さ、アドバイザーへの負担など課題も残った。限りある時間と予算の中で改革に取り組んで行きたい。塾を創りあげた皆々さまに感謝し、さらなるご活躍を！

【温暖化】 女性ばかりの5人組で、チームワークを発揮した。助言したのは、読者の顔を見失わず、問題意識を明確にすること。最初に一致したのが「温暖化は大事な問題だと思うけど、切実感がないのよね」という感覚。「読者にどれだけ切実で身近な問題なのかを伝えようじゃない?」。インタビューやルポも盛り込んだ美しい表紙付きの作品が完成。予想以上の仕上がりに感心した。

(高木鞠生アドバイザー)

【農業】 農家と消費者との交流会への参加や、有機農業と慣行農業の農家を現地取材しました。農業は生活と密着しているだけに、何となく分かった気がしているが、実際にはほとんど何も知らない分野です。遺伝子組み換えに至っては、当の農家でさえ、よくわからないのが実情です。「この問題はそう簡単ではないぞ!」ということが分かっただけでも、成果は十分にあったと思います。

(引野肇アドバイザー)

【脳と心】 初めて出会った人たちと物を作るのは新鮮かつ印象深いものでした。塾を終えての印象は、「多彩な背景の人をチームとしてまとめ、一つのベクトルにしていく難しさ」「動きが分散することによる危機管理の難しさ」。そして最大の成果は、若い人たちと杯を交わしながら、人生のこと、社会のこと、文明のことなど多くの語らいがもてたことでした。(室山哲也アドバイザー)

【産業と技術】 テーマごとの縦割り編成のため、横断的な議論が少なかった。講義も講師の体験だけでなく、実践的な取材のコツを盛り込んでほしかった。アドバイザーの計らいで実現した産業技術総合研究所の模擬会見は実戦さながらで、充実

した内容だった。新聞を新たな視点で読むことができ、新聞の奥深さ、取材や記事を書く難しさを再認識しました。(塾生 鈴木徹・日野彰彦)

【再生医療】 7人のチームだったが取材から執筆までやったのは2人だけだった。全員が大変多忙な社会人で、情報の収集・発信力を磨くために参加した人たちだった。演習の方法を変え、希望のテーマや、取材したい人を決めて、アドバイザーの人脈でセットして、皆で取材し、記事を書き、秀作を互選するとか、講評をするなど、新たな方法を導入すべきだと思った。

(田村和子アドバイザー)

【環境と化学物質】 環境中の化学物質が生態系や健康に影響を与える可能性がある、という指摘が「環境ホルモン問題」です。98年当時、メディアの伝える事実が科学的事実と大きく乖離し、社会的混乱が起きました。その背景は何だったのか、現在把握されている事実は何か、を軸に、当時を知る関係者の取材を中心にまとめた。インタビューにも積極的に取り組んだ努力を、評価したい。

(小出重幸アドバイザー)

【知的財産】 やや専門的なテーマなので心配していましたが、杞憂でした。自分たちで積極的に取材先への申し込みを行い、手塚プロ、知財高裁、早大などの取材も意欲的に取り組みました。ストレートニュース、解説、囲み、社説、遠隔地取材など多彩な記事構成が良かったのだと思います。今後は、知財の光と陰を考えて欲しいと思います。

(藤本瞭一アドバイザー)

【原子力】 発表会での努力も虚しく、人気投票でビリでした。しかし学者やマスコミ人がいる中でリーダー役と普通では出会えぬ人との出会いが最大の収穫でした。

(李凡・塾生)

内容は最も高度でした。科学ジャーナリズムの目的が、難解な科学を少しでも正確に伝えるのか面白く伝えるかで評価は分かれると思います。李君本当にご苦労さまでした。

(高橋宏・元大学教授)

(塾報告2のまとめ・藤田貢崇)

駆け足フィンランド科学の旅

日本フィンランドセンターが主催するプレスツアー「Feel Finland in Science」でフィンランドを訪ねた。4日足らずの駆け足旅行だったが、フィンランド流科学の一端に触れることができた。

まず印象的だったのは、訪ねた大学や研究機関がそれぞれにねらいが明確で個性的だったことだ。ヘルシンキから北東へ約400キロ、クオピオ大学は付属病院を持ち、ライフサイエンス研究に重点を置く。創薬から臨床栄養学まで、臨床応用を強く意識した研究が行われている。屈指の工業都市にあるタンペレ工科大学は、バイオからナノテクまで積極的に産学連携を展開している。

明確なミッションをもつ大学

先日、日本の大学を視察した経済協力開発機構（OECD）の調査団長と話していて、これらの大学が話題になった。英国人の団長は「日本には、こんな大学は一つもないでしょ」ときっぱり。フィンランドの国立大学は20。人口520万人の国には多すぎるとの議論も出ているそうだが、それぞれが自分たちのミッションを明確に意識し、よそとは違う独自の大学づくりをしている。

ヘルシンキ大学や病院、産業界などが一緒に作ったバイオメディカム・ヘルシンキは、約1000人の研究者が働く一大研究拠点。「基礎研究の成果を早く治療につなげる」と目的は明快だ。

話を聞いていて改めて思ったのが、フィンランドの地政学的な位置だ。ロシアとスウェーデン、

二つの大国のはざままで翻弄され、ロシア革命さなかの1917年に独立したばかり。20、30年前までは、欧州の片隅の小国に過ぎなかったが、今や、世界的な存在感を示している。

それをもたらしたのが、高い教育水準と、そして科学技術であることは間違いない。出会った科学技術の関係者が自信に満ち、将来を熱く語っていたのも、こうした実績が背景にあるだろう。

かつては宗主国だった隣国スウェーデンも、今ではハイテクを競うライバルである。並々ならぬ対抗意識が、言葉の端々から伺えた。

ミレニアム技術賞を創設

では、地理的に最も近い距離にあるノーベル賞はどうだろう。実際に国境を越えてストックホルムに赴いたのは、1945年の化学賞受賞者ヴィルタネンだけ。日本があんな位置にあったら、心が騒いで仕方のないところだろう。むろん受賞者が出ることは望ましいが、フィンランドはもっと別のところで勝負する、ということのようだ。

政府と産業界、学界が協力して2004年に創設したミレニアム技術賞は、人類に貢献する新技術の開発者を称える。賞金100万ユーロは、ノーベル賞にも匹敵する。いずれノーベル賞と並び称せられる賞にと、関係者は意気盛んだった。

生活を楽しむ姿勢も印象的だ。群ようこ原作で人気を呼んだ映画「かもめ食堂」に、フィンランドの魅力は、サウナの我慢比べや、空を切るエアーカー選手権だの、変なコンテストがたくさんあること、という話が出てくる。「そうそう、うちの奥さんも寒中水泳協会の会長だし」と北の町の栄養学の教授がいていた。

リナックスを開発したヘルシンキ大学出身のリーナス・トーバルズ氏は、「創造性の秘密は」と聞かれて「プレッシャーがあまりなく、学校でも、学校以外でもリラックスできる社会だからかな」と答えていた。家具一つとっても、贅沢ではないが、おしゃれなキャンパスを歩きながら、この社会の心の余裕を思った。

(辻 篤子)



▲バイオメディカムのパロティエ教授は世界的なゲノム研究者

チェルノブイリ原発事故20年 ベラルーシでの健康被害と医療支援

旧ソ連（現ウクライナ）のチェルノブイリ原発事故20周年（4月26日）を前に、さる2月、被爆国ベラルーシ、ウクライナ、ロシア、そしてジュネーブのWHO本部を訪ねた。長野県松本市に本部を置き、15年にわたる医療支援活動が続けている日本チェルノブイリ連帯基金（JCF＝鎌田實理事長）の事務局に同行した。ここでは最大の汚染国ベラルーシで見た健康被害と医療支援について報告したい。

いきなり私ごとで恐縮だが、20年前の1986年4月1日に、信濃毎日新聞の科学担当に配属された。その1カ月後に事故は起きた。科学記者として、真っ先に、それも原発がない長野県で出合った大事件が、「チェルノブイリ」だった。急ぎ上京して取材に走り回った。20年後に、放射能に汚染された現地を訪ねたのも、何かの因果かもしれない。

今も、なお続く「事故の影」

昨年9月、IAEA（国際原子力機関）など8つの国連専門機関と被ばく3国で構成するチェルノブイリフォーラムが、報告書を発表している。事故後、「死者は数万人から数十万人」との見方もあった中で、その影響を従来よりも小さく推計、「死者数は、将来も含め約4000人」などとしているのが特徴だ。一方、WHOの下部組織・国際がん研究機関は、今年4月、「がん死者は、2065年までに、40カ国で1万6000人に達する恐れがある」と報告している。

発がんについては、被ばくが原因なのか、因果関係はないのか、その区別は難しい。おまけに汚染地域は広い。さらに、評価が定まらないのは、旧ソ連時代からの官僚・秘密体質、現地の疫学調査の力不足もありそうだ。苦しい経済情勢の中で、疫学調査にまで、手が回らないのが現状なのだ。

だが、現地を歩き、医師や研究者に話を聞くと、「健康への事故の大きな影」を強く感じずにはいられなかった。小児甲状腺がんは、1995年に発症のピークは超えた。しかし、手術後のホルモン剤長期服用の影響、生活の質の低下防止、妊娠・出産などへのフォローをどうするのか課題は多い。一方、小児に比べ被ばく年齢が高かった「現在46歳以上」の人での甲状腺がんが増え続けている。白血病との因果関係の有無は、どうなのか。明らかに見られた先天性障害増加に対し、次世代の「い

のち」への影響はどうか。汚染状態が続く森のキノコ、野イチゴ、野生動物、川や湖の魚の食用、ペチカの薪の燃焼などによる内部（体内）被ばくもある。経済的に苦しいがゆえ、背に腹は代えられずに人々は口になっている。

事故後、精神的、経済的な苦痛からアルコール依存症が増えたとされる。「過剰な心配を持ち続けることは、精神衛生面からもいい

ことではない」とする、フォーラムの見解も分からないことはない。だが、「どうしたらいいのか」という答えは、報告書からほとんど読み取れない。

こうした中で、1991年以来、日本チェルノブイリ連帯基金、信州大学医学部は、二人三脚でベラルーシの最大汚染地ゴメリ州にこだわって医療支援を行ってきた。日本とベラルーシとの国レベルでの交流はほとんどない。それだけに、このような民間レベルでの医療支援の意味は大きい。

汚染地の人びとにこだわった支援こそ

残念ながら、この国では中央レベルの話には矛盾や現地との大きなギャップがある。独裁体制が憂慮される国でもある。それだけに、中央ではなく汚染地そのものに目を向け、医療・健康管理体制を整え、医療レベルの底上げをする必要がある。

彼らの支援は、単に医療品、医療機器を贈るだけでなく、現地に入って、現地にこだわって医療技術を提供する。汚染地の医師のレベルを向上させ、地方の医療技術を底上げさせ、均一化させることにある。医療従事者や現地の人との間に、信頼が育まれていることを肌で感じた。15年というマラソンのような支援の歴史の実績は重い。

「チェルノブイリ」から20年。事故を風化させないためにも、私たちは再び原点に立ち返って、今何が大切で、何をすべきかを考える時に立っている。原子力という「パンドラの箱」を開けてしまった人類は、危険と隣り合わせで生活することを強いられた。事故の影響に終わりはなく、負の教訓に学ぶことは多い。

（飯島裕一）



▲小児がんの子どもとベラルーシ国立小児腫瘍血液研究センターのオリガ・アレニコワ所長

「物理学校」出版余話

日本で初めて私学の理学学校として発足した東京物理学校（現東京理科大学）の歴史を書くことになり、物理学校50年史、100年史を通読した。明治初期の記録をもとに綴ったものであり、文語体と漢文が入り混じったものが多く甚だ読みにくい。当時の理学論文と物理学校や16人の創設者たちの動静、消息なども伝えている「物理学校雑誌」もほぼ完全に揃っているが、これまた読みにくい。

読みにくいということは、これを現代風に書き直してみても読みにくいのである。そんなとき、物理学校の創設者たちを書いた司馬遼太郎の「この国のかたち」の一節を読み直し、それがヒントになった。つまり、史実を確実に記録していくのではなく、そこに何がしかの創作を入れながら時には小説風にあるいは実録風にまとめる手法である。

こうすると読みやすくなるし、史実に沿って書けばノンフィクションの範疇にも入る。執筆に行き詰まると、こんなときには司馬遼太郎ならどう書くだろうかと思案しながら筆を進めた。



▲理科大神楽坂キャンパスの近代科学資料館（物理学校の外観がほぼ復元されている）

歴史小説を書く楽しみにも気づく

こんな手法で書いたのは初めてだが、非常に面白い。もう少し若いころに気が付いていれば、今ごろは歴史小説家として・・・という妄想は身の程知らずというものだろう。それくらい楽しんで書いた。

ITツールと手段の恐ろしさもたつぷりと味わった。明治時代の歴史的な出来事や人物の故事来歴を調べるとき、従来なら図書館にこもり、その種の事典や書籍を何冊も広げ、書き写したりコピーをとったり時には一日がかりということも珍しくない。いまは、キーワードとインターネットによ

って、ものの30分もすると読みきれないほどの資料を手にすることができる。

たとえば物理学校創設のときの明治14年は「明治14年の政変」があったことで歴史に名をとどめているが、これをGoogleの検索にかけると948件も出てくる。鹿鳴館時代を知りたいと思えば、「鹿鳴館」のキーワードで29万4000件の検索結果が示される。こんなことができるようになったのは、ついこの間のことである。この数年間でデータベースの使い勝手と情報検索の世界に革命が起きていることを改めて実感した。

歴史的な事実インターネットで

インターネットの情報には、質の格差がある。真偽の判断がつかない情報も多い。しかし歴史的な事実については、あまり心配がない。この種の情報は、大学、図書館、博物館、資料館、自治体関係など信頼に足りうる情報発信源がほとんどだ。歴史的な事実を調べるには、インターネットは必需手段であると思った。

写真についても、いながらにして歴史的な写真が手に入る。ただし出版物として利用するには著作権をクリアしなければならない。国会図書館のウェブサイトには、多くの歴史的な写真が掲載されているが、これを利用するには非常に面倒な手続がいる。著作権がすでに消滅した大昔の写真を使うのに、なぜ手続が煩雑なのか。情報はいつでもどこでもいながらにして入手できるようになっているが、それをいざ使用するとなると数十年前からの文化を引きずっていることになる。これは権利の濫用ではないかと腹が立ったこともある。

物理学校史を調べながら日清、日露、日中、太平洋と4つの戦争のことも読む機会があった。ショックだったのはいずれの戦争も日本が先に仕掛けたことである。歴史認識の大切さをこの年になって初めて分かったことは不覚であった。

（馬場錬成）

（注・筆者は東京理科大学理学部卒で元読売新聞記者。『物理学校近代史のなかの理科学生』（中公新書ラクレ）を3月に出版。現在東京理科大学知財専門職大学院教授。JASTJ会員）

アジア初のPCST-9国際会議に参加して

5月17日、韓国ソウル、江南の新市街。会議会場のCOEXのホール入り口では、ガラス張りの天井から下がる色鮮やかな青と黄の垂れ幕が目をつけた。第9回Public Communication on Science & Technology国際会議（PCST-9）は、水族館、ショッピングモール、総合貿易センター、ホテルなどの複合施設で幕を開けた。

会議の主テーマは、Scientific Culture for Global Citizenship（地球市民のための科学文化）。PCSTは、科学・技術と社会、伝統と現代技術、そして科学と人間性とのコミュニケーションを育む世界的なネットワークとして育ってきた。科学コミュニケーター、科学ジャーナリスト、科学コミュニケーションの研究者、科学館関係者などの多様な人が集まり、共通の問題に取り組み、新しい関係を作り出していこうという試みだ。

会議で取り上げられたテーマは、韓国でのES細胞捏造事件を中心に議論が盛り上がった「生命倫理と科学」、遺伝子組み換え作物報道などに焦点を当てた「マスメディアにおける科学の扱い」、あるいは「最先端技術と社会の関係」や「現場で活躍する科学者たち」など多岐にわたる。私の印象では、どのセッションでも、コミュニケーション関係者の学会に相応しい、率直で実りある議論が多く交わされ、活気が溢れていた。

地域密着型のコミュニケーション

「地域密着型の活動を重視した手法を集めて、世界の科学コミュニケーションを活性化しよう」とは、会議の科学委員であるBernard Schiele氏（カナダ、ケベック大学教授）の言葉だが、日本や韓国に関しては、まさにその言葉を実践していたのが今回の会議だった。

今回のPCST会議はアジアで初の開催。閉会式では、3日間の会議のダイジェストを、見事な演出のDVD映像で再現、拍手喝采を浴びた。発表によると、総参加者数は463人。半数以上は韓国からだが、2位はなんと日本の69人。3位の中国18人以下を引き離れた。それにしてもアジア諸国

の健闘ぶりが目立っていた。

日本から37件の発表、特別講演も

1989年、フランスで開催された第1回会議以来、日本からの参加者は多くても数人だったと聞いているから、様変わりの日本は各国の注目を集めた。地元韓国からの発表は口頭発表73件、ポスター発表32件だったが、日本は口頭26件、ポスター11件。東京大学、北海道大学、大阪大学、そして、本会議で講演した北澤宏一氏が理事を務める科学技術振興機構など、各地の様々な大学、研究機関からの参加が見られた。私が所属する京都大学の加藤和人研究室からは大挙12人が参加し、情報収集に励んだ。



▲ポスター発表をする筆者（左端）

私はポスター会場でOpinions of Life Scientists on Science Communication in Japanと題して発表した。似たようなテーマに取り組んでいるドイツやオーストラリアの若手研究者と知り合い、議論を楽しめた。この繋がりを今後活かそうと思う。

「Not too many, but many Japanese.」と微笑んだのは、科学委員の1人、Manoj Patariya氏（インド）。日本人についてどう思うか、尋ねたときの返事。「この傾向が続くこと、そして日本からの面白い発表が出てくることを期待しているよ」と付け加えた。2008年、スウェーデン・デンマーク共催で行われる第10回PCSTでの日本人の活躍を期待したい。（東島 仁・第3期塾生）

連載 米国サイエンス・ライティング留学記 ②

バイオ都市、サンディエゴで学んだこと

"The door is always open." (科学ジャーナリズムの世界へのドアは、いつでも開かれているのよ)。2004年、サンディエゴで開催された聴覚学会の記者会見会場への道すがら、リン・フリードマン先生がふと口にした。カリフォルニア大学サンディエゴ校 (UCSD) のエクステンション・スクールで受講していたサイエンス・ライティング・コースの課外活動で、記者会見に参加したときのことである。

サンディエゴは科学技術都市で、世界をリードしている研究所や企業が多いからホットな科学ネタがごろごろしている。科学記者やサイエンスライターとの出会いも多い。学会やシンポジウムが頻繁に開催されていて、サンディエゴ・ユニオン・トリビューン紙は、やや「科学より」と言っているほどの地元紙。街そのものが、科学コミュニケーションの場とも言え、サイエンス・ライティング留学には最適な場所だと思う。

授業に参加していた学生15人は、地元大学の理系学生、現役のライター、バイオ企業の人などで、外国人は日本人の私以外にイタリア人、中国人、ドイツ人がいた。サイエンス・ライティングの楽しさや難しさを共有できる仲間を見つけたことが、私には何よりうれしかった。

チャレンジングな宿題

宿題はチャレンジングだった。学术论文をもとにしたり、クラスメートをインタビューしたり、さらには効果音のついたラジオニュースを想定したりして、記事を書く練習をした。全米の新聞に掲載された主要科学ニュースをスキャンできるウェブサイトSigma Xiを毎日チェックする課題も必須で、毎週授業の始めには科学ニュースチェック度のミニテストもあった。

学期の後半には、私たちは早くも科学出版界の入り口に立っていたが、「チャンスは、誰にでも与えられます。でも現実には厳しい。自力でチャンスをもつ努力をするように」と言われた。ライターとして、とにかくデビューすることが重



▲最終授業に集まったクラスメイトたち (前列右端が筆者)

要で、クラスの3分の1ぐらいが、自分に合ったメディアを見つけて書き始めた。ソーク研究所からきていた学生は、研究所のニュースレターに投稿、Science誌のオンラインニュース欄で書き始めた人もいた。私も負けていられなかった。

垣間見たライターの美意識

あれから1年半。現在の私はというと、編集者としてよちよち歩きを始めたところか。思い起こせば、アメリカのサイエンスライター協会の会報編集にかかわっているフリードマンさんから一番学んだのは、科学ジャーナリストやサイエンスライターとしての精神性だと思う。

授業で業界の話を披露してくれたデューク大学の科学コミュニケーターや眼科雑誌「ユーロタイムズ」の編集者らから、科学ライターの美意識を垣間見ることもできた気がする。

フリードマンさんは「サイエンス・ライティングも文学の一つと考えたらどうでしょう。科学について書くと、どうしても文章表現がドライになってしまう。科学が好きなら、その気持ちを大事にして、温かみのある豊かな言葉を使ってごらん。そして、同じミッションを持つ仲間たちを大切に毎日を送るのよ」と念を押してくれた。

(館野佐保)

世界各国の科学ジャーナリストの団体が加盟する組織であるWFSJは、5月下旬に初のニュースレターを発行した。JASTJは、WFSJの設立当初からの加盟団体。ニュースレターの主な記事を紹介する。

【第5回科学ジャーナリスト世界会議(WCSJ)について】

いよいよ開催まであと1年を切った第5回WCSJ。2007年4月16-20日、オーストラリアのメルボルンで開かれる。300-400人が参加する見込みで、連邦政府や州政府などから110万オーストラリアドルの資金調達を目標としている。この資金は、開発途上国から50人の科学ジャーナリストを招くのにも使われる。

5月15日には組織委員会の第1回会合が開かれた。責任者の一人であるNiall Byrne氏(科学コミュニケーション・コンサルタント)は「プログラム作成のために、私たちは世界中からアイデアを集めています。多くのアイデアや意見を待っています」と述べた。また、この世界会議の意義を「まずオーストラリアの科学ジャーナリズムのコミュニティを作り上げること、そして科学ジャーナリストの国際的なネットワークを維持し、科学報道についての質や広がり向上をさせること、さらにオーストラリアの科学と科学者を世界中の人々に知らせることにあります」と語った。

より詳しい情報は、<http://www.scienceinmelbourne2007.org/>を参照。

bourne2007.org/を参照。

【優れた科学ジャーナリストの育成のために】

WFSJは、「開発途上国の科学ジャーナリズムに対する支援プロジェクト」を開始した。これは開発途上国で働く科学ジャーナリストの能力向上を目指して行われるもので、各国の経験豊富な科学ジャーナリストが指導に当たる。まずは中近東とアフリカのジャーナリストへの支援のため、7月に最初のトレーニングが行われる予定で、カナダ・カルトン大学のO'Hara教授(ジャーナリズム学)が現在プログラムを作成中だ。すでに対象地域の22カ国から80名以上が応募している。

今後はラテンアメリカ、アジア、さらに東ヨーロッパへと支援プロジェクトを拡大する。

【カメルーンがWFSJに加入】

WFSJに新しいメンバーが誕生した。カメルーン科学ジャーナリスト協会(Association of Cameroon Science For Life=SciLife)が、WFSJの29番目の加盟団体となる。カメルーンはアフリカ中央部西海岸の国で、SciLifeの代表であるMbarga氏は、「開発途上国の科学ジャーナリズムに対する支援プロジェクト」でフランス語圏のアフリカ諸国における地域コーディネーターを務める。

(藤田貢崇)

新入会員の自己紹介

● 福士 珠美 (科学技術振興機構 社会技術研究開発センター研究員)

研究者として神経生理学に長く携わっていましたが、現在の仕事(脳神経倫理学の学問探査と一般向け啓発活動)の一環として、脳科学のことを社会に向けてわかりやすく誠実に伝える方法論を学んでいくことができたいと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

● 西野 博喜 (歯科医)

開業医として咬合学に関心がありますが、自分の専門分野などの知識や情報を公衆化する作業を視野に入れています。JASTJは、時流に乗り、オープンな雰囲気勉強できる場だと考えています。塾(4期)への参加目的は同様でした。専門外の一般の方々に情報を発信できればと望んでいます。

● 鈴木 萬理子 (英国大使館広報部科学技術担当)

大使館広報部で科学技術広報を担当しています。科学ジャーナリストの方々とのコンタクトを取るとは

もちろん、科学ジャーナリズム、科学分野の動向を知っておく必要性や、個人的にも科学全般に興味があって入会いたしました。

● 森 絵美 (講談社 週刊現代編集部 編集)

自己紹介をすると10人中9人に「なぜ理系なのに出版社なのか」と聞かれます。大学では理学部に籍をおいておりました。最新の科学技術を面白く、そして科学に対する壁や誤解を少しでもなくするような記事が作れれば、と思っています。

● 一色 華子 (慶應義塾大学大学院)

物理学の博士課程の学生です。自然科学と社会との関わりを考えたとき、科学ジャーナリズムに強く興味を持ちました。しかし、自分がどう関わっていけばいいのかはまだ分からない状態です。当会を通じて科学を伝えていくために何ができるか、を大きな視野で考えていきたいと思っています。

事務局だより

■ ジャーナリストを目指す学生に割引

長野県の1高校生から「科学ジャーナリストを目指しているので入会したい」との希望が寄せられたのをきっかけに、総会前の理事会で協議した結果、生まれた優遇制度です。大学生以下（大学生、高校生）の会員は年会費が半額（6000円、地方会員にはさらに半額の3000円）になります。ただし、大学院生は修士から博士課程まで立場が多様で、数も多いので対象といたしません。

■ 会費納入後、写真入り会員証を発行

6月中旬に、今年度の会費納入のお願い文書を送付いたしました。個人会員は7月末まで、法人の賛助会員は8月末までに送金をよろしくお願いいたします。2年継続して未納の場合、会員の資格を失う規約となっていますので、該当の方には事務局から継続の意思をお聞きする予定です。

納入が済んだ方には会員証を発行する予定です。顔写真（通常写真またはデジタルの写真データ）をお送りくださった方には、顔写真付きの会員証にいたします。

振込先

みずほ銀行虎ノ門支店（普通）1826458

名義 日本科学技術ジャーナリスト会議

または

郵便局口座振替 00120-5-369724

名義（加入者名）JASTJ

■ 賞の表彰式を終えて

科学ジャーナリスト賞に応募のあった34件について、選考委員会にかけの前段で理事全員が参加する形で作品を読み、または映像を観させていただきました。日常見落としていた科学技術に関連する作品やジャーナリズム活動が、この1年間になんとさまざまあり、また新しいメディアが登場しているかも分りました。こうした発見や情報を今後、会員の皆様にどう伝えていったらよいかを考えたいと思います。

表彰式では米沢富美子先生が「受賞者は5人ですが、ものすごい接戦で5人以外にもいい作品を書いてくださった方が多かった。100万円とか副賞もないのだし、費用がいらなら、もっとたくさんの人に賞を出したらいい」との発言が心に残りました。賞をよりよいものにしたいと願っています。



新刊紹介

会員のBOOKS

「物理学校—近代史のなかの理科学生」

馬場錬成著（中公新書ラクレ・880円・06年3月刊）

いま東京理科大学といえば、多くの人は「坊ちゃん」が通ったという東京物理学校ですね」と、その昔を思い出します。明治の初め、東大物理学科OB21人が、理想に燃えて設立した夜間の私立理学校。彼らの苦心を中心に、元新聞記者が資料を駆使して波乱万丈の時代を描いている。「会員だより3」に著者が執筆のエピソードを書いている。（K）

編集 後記

- ・ 生垣の満開のさつきが鮮やか。緑が一段と濃くなっています。初夏のソウルでのPCST会議から帰国、編集作業に取り掛かりましたが、今号は国際色豊か。フィンランド、ベラルーシ、韓国、アメリカ。JASTJ会員の活躍の舞台は世界に広がっています。
- ・ PCSTでの日本人の存在感は「ハイライトのひとつだった」とPCSTネットワークの会長が指摘しています。確かに、若い研究者やコミュニケーターがソウルに集結しました。「会員だより4」で報告がありますが、ジャーナリストの参加がもっと必要だと思いました。
- ・ 今号の目玉記事は科学ジャーナリスト賞決定。3ページにわたって、担当幹事が詳細を書いています。スペースに余裕があれば、大賞の元村さんのインタビューも試みたかったところ。来年以降が楽しみなってきました。科学ジャーナリズム活性化の一助になればいいですね。（賢）

写真撮影者（数字は掲載ページ）

片桐良一(3、4、5)、瀬川至朗(6)、藤田貢崇(7)、漆原次郎(8)、辻篤子(10)、飯島裕一(11)、牧野賢治(12、13)、館野佐保(14)

編集・発行

 **日本科学技術ジャーナリスト会議**
Japanese Association of Science
& Technology Journalists (JASTJ)

〒102-0073 千代田区九段北1-4-4 九段下高橋ビル7階
(株)ジェイ・ピーアール内 電話・ファックス 03(3511)8004
会 長 小出五郎 hello@jastj.jp
事務局 佐藤年緒 hello@jastj.jp
編 集 長 牧野賢治 makinok34@yahoo.co.jp

ホームページ <http://www.jastj.jp>